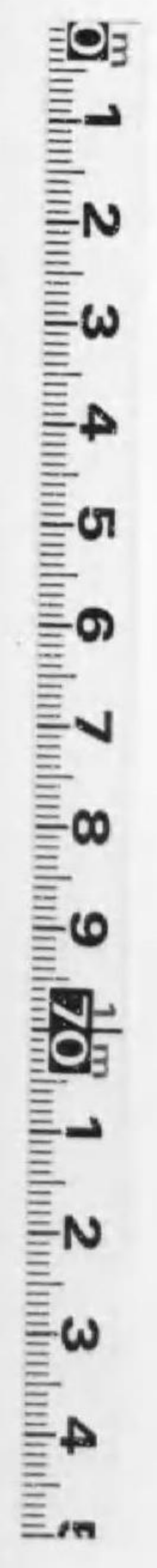


特115
977



始



持15
917



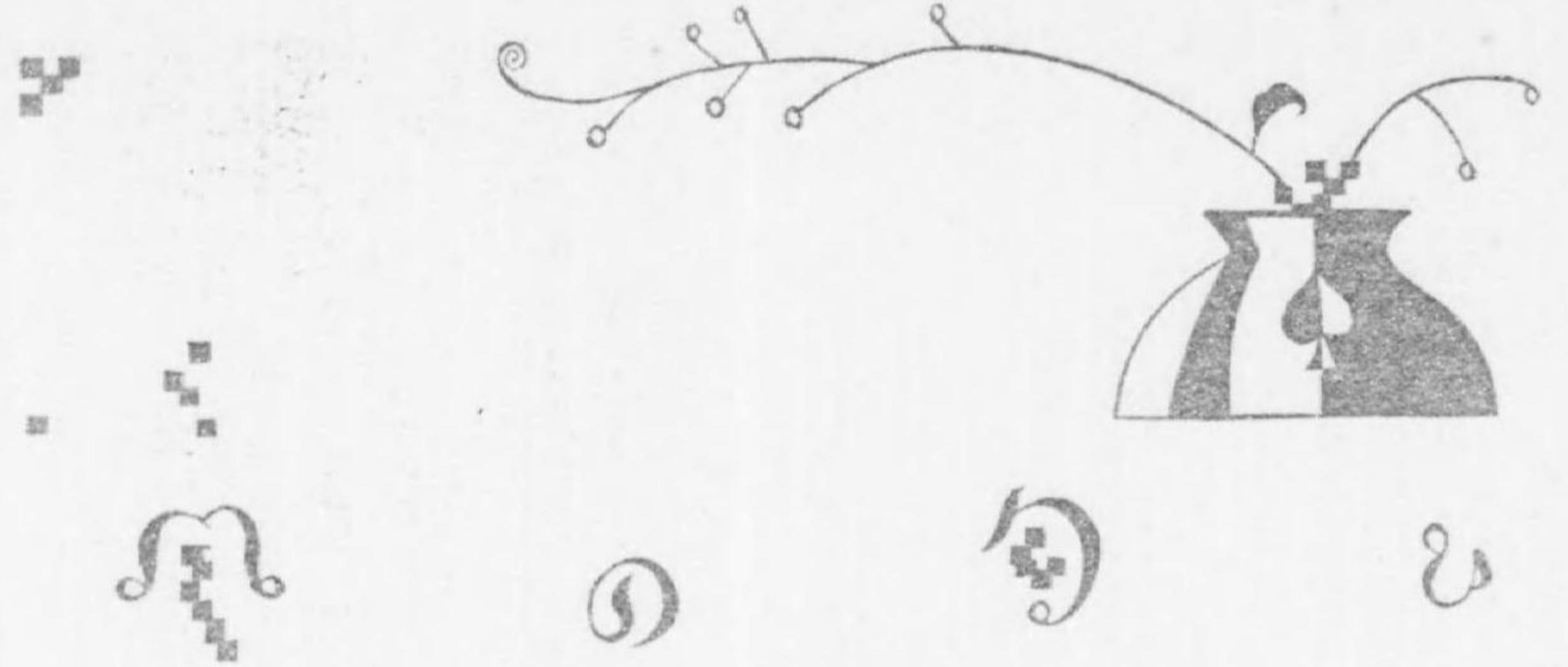
持郎集

風之入



大正
15. 6. 5
内交

Taki. Dessen



序 曲

風に熱れて晴衣着た娘等の祭よ
炎の輪廻
ライフの軌道は寒くとも
燃けて行進め。

I 麥笛小情

脊戸に出でて麥笛ふけば魚のやうに
集つてくる娘等である。

II

麥笛が娘の胸につゝたてば
まんまるくなる乳房である。

女竹ふく風の音信

ふんすゐのソブラが枯芝生に胎み、春むいた風がおしやれの舞奴です。なだらかな公園の坂道を、バツバツビシガレットの煙玉が飛んで、クネクネって自轉の輪がはづみ乍らのぼつて往きます。

リキユウルの洗禮に微笑んだつくしが、白足袋をかついで陽氣な祭です。くろい絹手套のつゝましいひがんざくらが織麗な日傘を、ゆるやかにまわして、春の鐘鳴る。春の鐘踏る。

白い窓下を雪解の水がフェルトの草履をはいてそゝろ歩き、ひとりごちの僕の心をどうきどうきさすなんてなんて可愛ゆい曲者。

せゝらぎに岸洗ふひとのきれいな指指のまたから、チロチロもれて流れゆく空色の水草。水淺ぎのちいぢやな花さく僕の青春。ホロホロとこほろぎの歌に似てゐます。

もうひとしきり寒氣がやつて來たら、元氣なあひるのひなもすぐ消えてしまひそうな一粒の泡です。

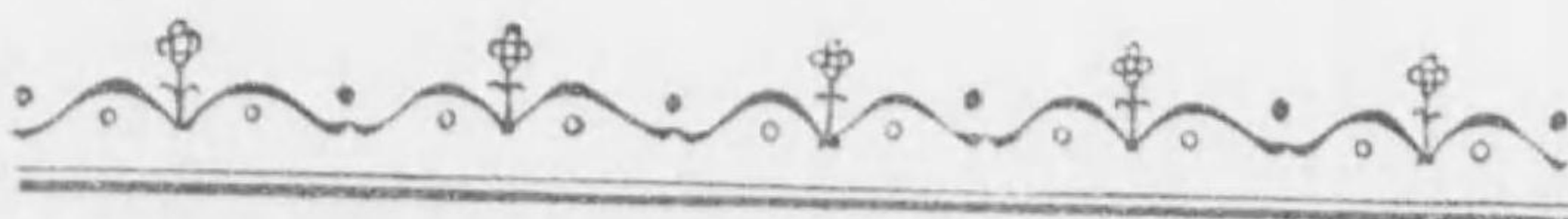
春未だ淺いくぬぎの林をひねもす遊ぶうなぞこのうをです。おのが鱗の寂しい光にせめても生きる名も知らぬ陸魚です。かなしい僕のスタイルです。

牛乳屋さんは枯木で、郵便屋さんが素通りです。何かしらつまらない僕です。しろ紙に草いちごの炎を押し寫して燃わつく様な唇紅の跡です。ピンクの封筒にそつと秘めて、僕が僕あてに出すマヂックの便りです。——風にうれた旅の、あらい海がキラキラ見ゆる温室にて——

こんな日はポケット・グラスを研いで、リンゴのやうな君の頬をひらいます。

銀ねづみの夜になりました。くりむむ色のへやにナタ豆の灯をつけて、女竹のやうなハイモニカの散策です。しようろう竹にマドロスパイプのけむり、さていきづまる蘭のにをひです。

大正十五年の早春





井上多喜三郎詩集年譜
 大正十一年 華 笛
 大正十三年 花 東
 大正十五年 女竹ふく風
 絶版 絶版
 聖火詩社 聖火詩社

録
 散文風の句ひ
 詩小曲風景
 評論抒情詩斷想
 装幀 井上多喜三郎
 多喜三郎素描(寫真) 井上松嶺



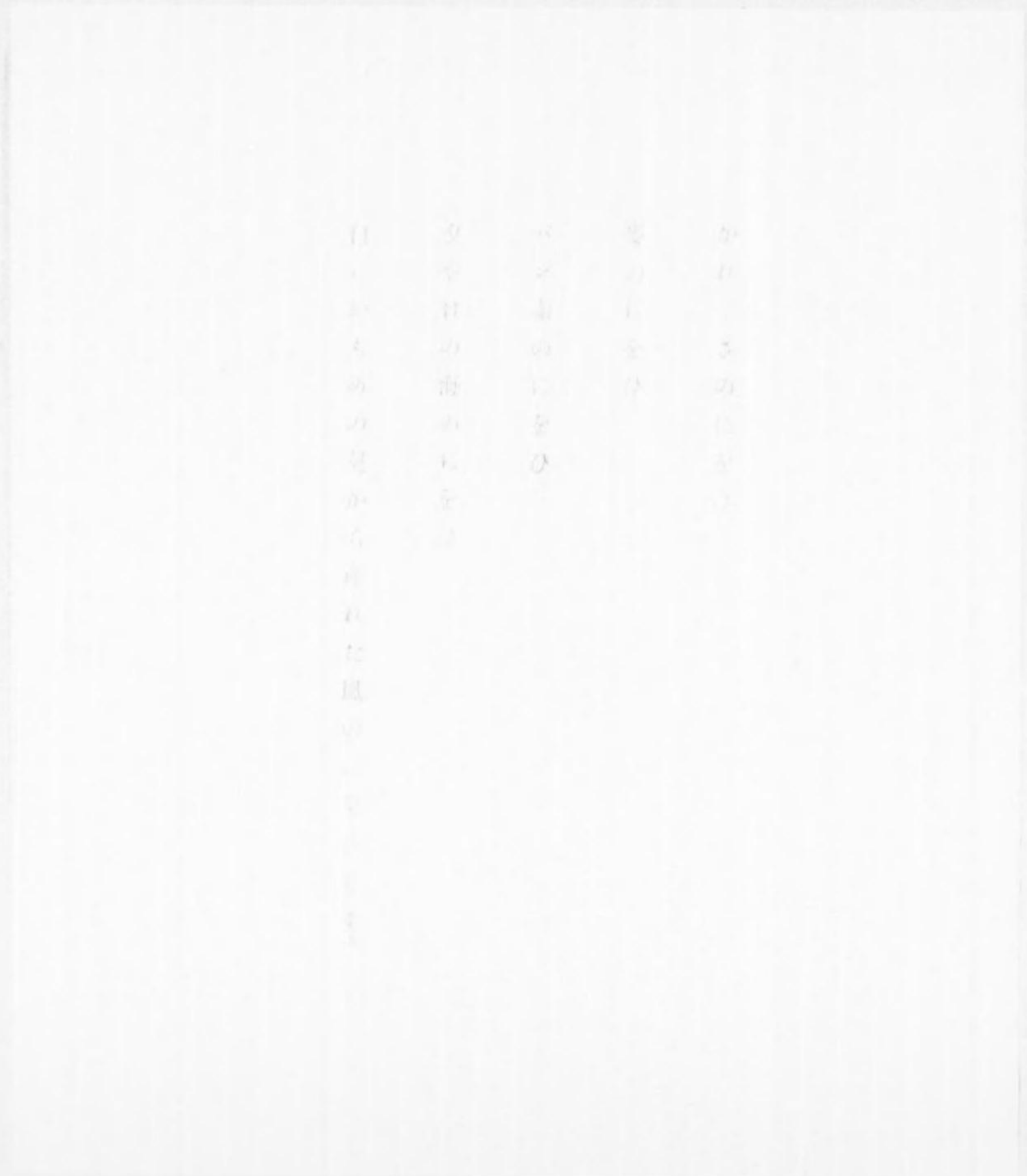
かれくさのにをひ
 麦のにをひ
 バン素のにをひ
 タヤけの海のにをひ
 白いかもめの翼から産れた風のにをひです。

Virgin



作	品	表
娘	素	描
手	風	琴
お	も	で
点	ひ	夫
	燈	
	月	
し	の	め
小	鳥	海
モ	オ	捕
マ	ダン	ガ
	ド	アル
	ン	ナ
ト	ラム	ブ
		断
		章

//この詩集の餘白はゴエトリー
 フォア。ゴエトリーに對する讀
 者メンタルベシス欄に適用あ
 りたし。作品は隨意之を脱ぎて
 携行・時代的はんざつでノーブ
 ルな生活意識への肉体的意圖な
 靈的散策に資せられんことを念
 す //



Virgin



作	品	選
娘	素	描
手	風	筆
が	も	で
点	登	夫
	月	
し	の	海
小	鳥	景
モ	イ	園
マ	グ	ガ
	ン	ア
	ド	ル
	ン	ナ
ト	ラ	景
	ム	章
	ブ	

この展覧の題目は「オクトー
ブ」で、オクトーに對する思
考メンター・ヘンツに對する
対し、作品は隨意を脱ぎ、
流行・時代的はんさつでノーブ
ルな生活意識への肉体的態度を
畫的彫像に資せられんことを念
す。

かきこゝろはつねに
口裏で
はひらいてみよと
おもひで
かきこゝろはつねに

おもひで

上いさつはの
手風琴は
かきこゝろはつねに

手風琴

わがこゝろはつねに夕暮
 自陶に
 ほのかにてつよき瓦斯燈の光をひ
 おもひでは
 青いシネマの箱をふく。

長いまつげの瞳の中で
 手風琴は
 娘とともに育ちゆく。

あつたものやうな
去来しいや校をともして
クックンてかへる小見で
ばかり開るい街の灯が
...

点 燈 夫

暗水無し、ふごきと
織長な紙のナイフで
付回れど寂し
約束もせで君待つ間し
さねいな果物は長くと世に...

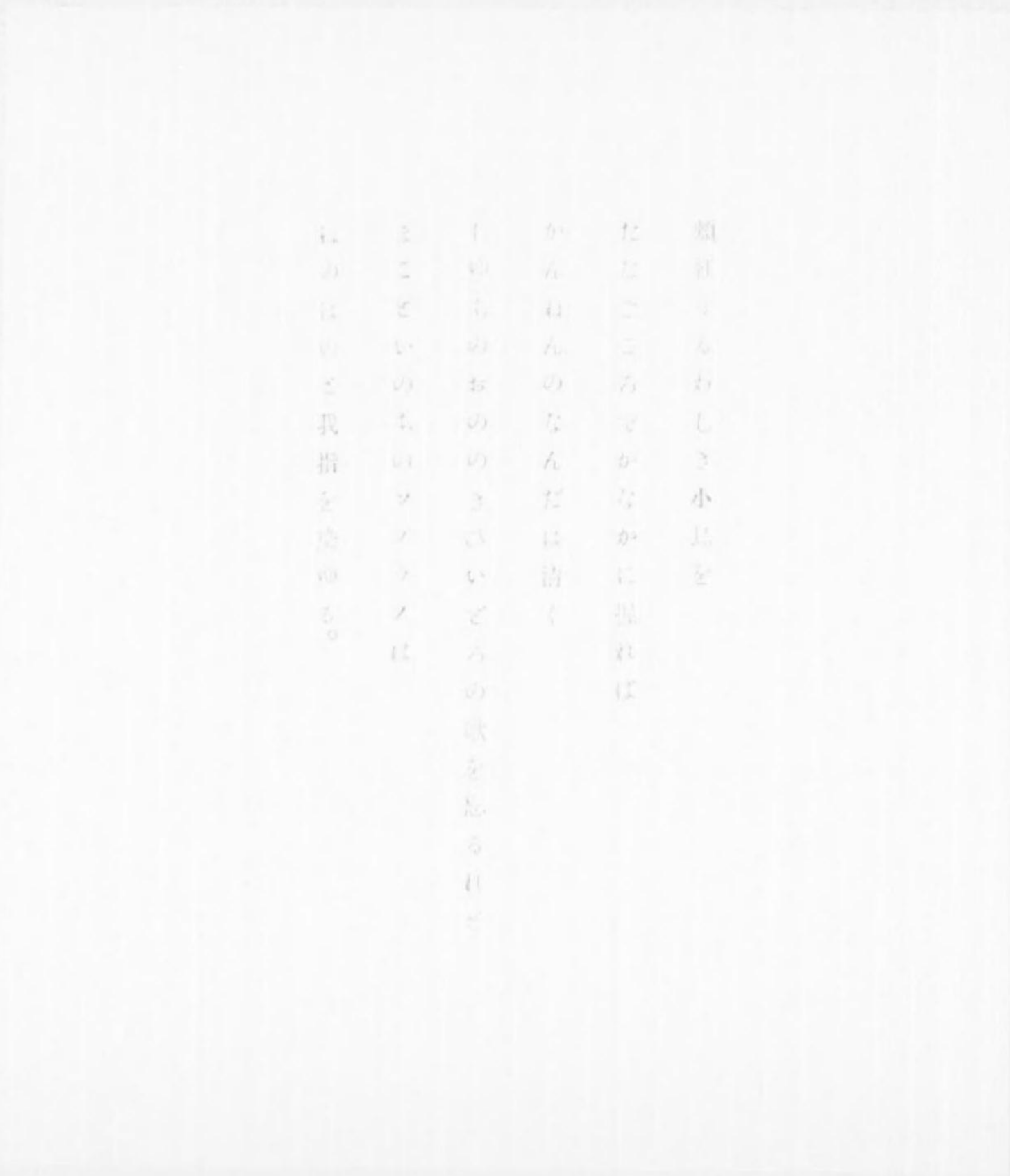
月

ろうまつちのやうな草々に
素晴らしい夕焼をともして
タッタッてかへる小兒で
ばかに明るい街の灯が
ハアッどつくのです。

泉 煙 夫

噴水盤にりんごがひざおつ
繊銳な銀のナイフで
料理れど寂し
約束もせで君待つ園に
きれいな果皮は長くて赫し。

月



類はつらわしき小鳥を
たなごころでかなかに捉れば
かみねんのなんだは消す
しゆんのおののきびいでろの歌を忘るれど
まごといのちのソノソノは
いふはいと表指を忘るる。



小鳥捕圖



海は海に鳥の影と
しゆんのおののきびいでろ
まごといのちのソノソノは
いふはいと表指を忘るる。

海鳥のめし

頬紅うるわしき小鳥を
 たなごころでかなかに握れば
 かんねんのなんだは清く
 しゆちのおののきびいざろの歌を忘るれど
 まこといのちのソプラノは
 はのぼのと我指を染ゆる。

港の海にひねびねと
 しののめのごよめき
 りきやうるの瓶をゆする
 かそかなる人魚のなげかひ。

ねれうきマント
 とほろしの君を近ひてうまは
 鳴るその街にいづれば
 マントを脱ぎ食を求め
 いそいそかゝる人々の
 よこれしガキマツしつゝる路を
 マントのどこぞ先にくるまら
 れぬ葉のとして雪止めぬかす
 マントの影さにくはくは

Madonna,

旗本屋の長が寝る
 花屋に悪い灯がはせら
 街角を
 エキゾチックな街ながら
 もくいの
 かあるい風の
 すがしい津路で

モオダン、ガアル

われ赤きマントルに
まぼろしの君を追ひてさまよひ
ゆうぐれの街にいづれば
サクラメントノ食を求め
いそいそかへる人々の
よこれしジャケツにつやら舞き
マリアのごとく光にくるまる
われ果然として雪にぬかすき
スカートスカートの黒きにくおづく。

Madonna,

植木屋の花が綻び
花屋に明い灯がはせる
街角を
ホキリボギリと折れながら
ちゝいろの
かあるい風の
すがしい摩術です。

モオダン、ガアル



断
想
抒
情
詩





抒情詩
断想

七彩のおしらい箱から
 真赤な季節の
 くらぶわで離りだす
 素敵な風扇のにをひです。



風強くして金の炎は燃ゆ揚り、風静かにして敬虔な詩を産む。白い街を人の群と歩みて情熱を紡ぎ、ひとり松籟を眺めて詩を想ふ。

詩興は刹那である。生命も又刹那の聯續である。刹那に爆けよ。

詩はおもひでなく、殺那恍惚の詩興が、何かの機會に於ける刹那の刺激に情熱を流過して涙のやうに湧出する最も秀れた信念の姿である。(抒情詩を詩作家の道程と呼ぶは過ぎた青春へのあはれな負おしみである。)

道徳律に左右せられたくない。よき信念にすなをなれ。空と地にのびゆく一本杉の勢ひ。誰れもよき信念のひろがりにはかなわない。詩は神聖にして憎惡にさね親愛を持つ。

童心に飯れ。あかどきの月にすゝり泣く信念こそ永遠にのびゆく。

香具師とを食にくさつた社會が製造する涙は化粧水に外ならない。

神の國に於ても嘘をつかない人間こそほんごうの詩人である。

詩は永劫我を捧げる八月の海である。

詩は自らが髭を摘む銀の鉄である。



至純愛は無智である。涙に通はない詩は詩でない。

感傷はこゝろで詩でない。性欲を超越した瞬間の默祈接吻こそ高踏な詩である。

詩は七情をほしいまゝにリズム化した水彩畫である。

繪と音楽いゝこうる詩

いちまいの笹葉にさね光輝するラインの歌、風の色、季節の匂ひ、生命の流音。

詩は生きてゐる。

一粒の露薔薇のリングでなく寫眞でもない。神の攝理を麗宿に求めた不死の宗教である。

我あるが故にミリウ輝く。

一粒の露・空・人間・海の共通心理産物であり。一粒の露・大宇宙の生命を構成する。

詩人はデカダンのファンタステイックなクリエイターである。



光と影をフォームしたテイルラインのオリヂナリタイロックスこそ詩人のいのちである

りんかくのきわだった寫眞は三十世紀に流行らない。地位と生活のためにきざなアートラインを振り廻してアーティストぶる詩人よ自殺せよ。擬古的なアトモスフィアを破れ。エポックはかんだんなく行進む。エフニクデイイグな多喜宇宙論よばんざい。

ポエトリー・フォア・ポエトリーである。潜在意識のミレージである。

詩はインスピレーションが興わる高貴なサムシングにして、エポックライフへのサジェストである。

詩は外的衝動に依り内的主動が無意識構成する明魂の發露である。

詩は各々が持つよきパッションを以つて各々がよき活動抒情人形たらしめよ。

モオダン・ガアルのビューアなパッションこそ僕のいのち。詩のスタイルである。



309
85

大正十五年五月廿日印刷納本
大正十五年五月二十日發行
著作家 井上多喜三郎
印刷者 細谷眞美館
發行所 聖火詩社
東京市目黒區目黒二丁目
電話號碼 八六二
頒價 壹圓也

終

